

時々涙を流すことがあるのですが、あなたはどのような時に涙を流しますか。

私には不思議なことがあったのです。涙を流すと世界の見え方が変わったという、不思議な体験です。手前勝手なことですが、それもまた一興かと。空にはとても広い雲が流れている。当たり前ですが、私にはとても楽しく思えるのです。

人は何故、涙を浮かべるのでしょうか。笑うから、それとも泣くからでしょうか。そんなことを哲学の世界に導いてあげるのもまた楽しいことかと思えます。

涙の意味に気付いたとき、人は優しさと温かさを身に着けます。そんな風に答えを導くことは特に面白くないと思っても仕方のないことなのかもしれません。いつの間にか、自分でそのことを自覚してしまう以外に。きつとそんなことを続けたくて、涙を流すことを考えているのかもしれません。結果、人はとてもやさしく、ぬくもりある情感あふれる人になるのでしょうか。ところで、あなたに質問があります。聞いていただければ幸いです、存じ上げます。

この世界は何があったら破滅の刻を迎えるのでしょうか。

人がいなくなったら？ 動物がいなくなったら？ それとも、神の手によって動かされているから？

私には何も無いことから始まった原始の力を信じられている信仰。それが身体に宿っているのです。不思議なことでしょう？

時に何かを知っていたとしても、何もしないでも、そして何かを行ったとしても、それはと

ても靈感の強いものでしょう。酷く嗤っているカチをした、嘲りの言葉を残して。

さて、私は何をしましょうか。この世界に何も残すものがないということを知っているのですから、少しは楽しいことでもしましょうか。人の形をした私は神の世界を創り上げていく、そんな偉業を残して。

いずれ、何かを知ったとき、人は失われていく。何もしなくても、それはそれでいいのだらうと、一人で思ってしまう。詮索なんてしたくはないのだけれど、それでも人を信用するためにはそれは必要なのです。私はここからどこに行きましようか。あなたもついてきますか？ それとも少しでも良いからと楽しみを求めますか。月の妖しげな光は私を輝かせる。一人で歩いてきた過去を振り返って、いつも前を見据えるそんな私をじつと見ているような気がして、私は笑う。

私は森の中でじつと屈んでいる兎のような食材を見つけて喜ぶ猛獣があまり好きじゃない。そしてこれからも。

いつしか、自分だけのことを考えているのが私だったりするのです。一体何を言いたいのかわかりませんが、大地に広がる、世界の真ん中で私は涙を流す。ただただ、それだけが変わらない。あなたを求めたのは誰なのだろうと、わかりませんが、月の光に心を灯すことが私の楽しみであり、そして答えを手にするのは何も、一つのことではないのです。私が知る限り、シルフェイドに映された心は何も映すことができないのですから。どこにでもありそうな答え

は少しずつ、知っていく限りの一抹の不安。そしてこれからもずっと。

世界の変遷を止めることができない。だから稲妻は轟く。大地に火炎を昇りゆく竜の姿。こは雪山に飛来弾が飛んでくる場所。

いつも笑っているのはどうして。私は言葉を失っていく。やがて意識が昇りゆく焔に溶かされていくとき、失った。

「神様の稲妻」

ねえ。知ってる？

なになに？

私はね、いつものように楽しいことをしたくて、ここにいるんだ。

そうなんだ。でも、普通に楽しいことができなかったの？

だって仕方ないもん。

どうして？

自分のことを忘れていたんだから。

「はあ、こうやって日記を書いていくんだな」

私はベランダに座って、晴れ間の天気には輝く白色のデザッサンス椅子に座る——通称、ハク

イス——。そこに何かが変わっているのだとしたら、日記を書いている私をお陽様が照らして私は若干の汗をかいているぐらいだろうか。私のことについては何もしないが、それだけ、楽しいことなのだろうか。

最近、庭師が来ないので、ペランダの緑色の雑草が刈り取られていない。鬱陶しいこの上なのだが、あまり、手を触れなくても、台風、轟く稲妻が焼いてくれるからそれはそれだけ、楽なことなんだと思っている。

一人で、デザッサンス椅子に座つてのんびりと誰かとの記録を残している。今でも少しずつ、何かがわかつてきた気がするけれど、それでも子供の頃から、よく笑っていたのは思い出せる。一人が哀しくて、涙を流すことも思い出せる。いつの日も二人で暮らしていた頃が懐かしかった。今ではもう忘れ去った思い出だけ、私にとっては大切な思い出。一緒に過ごした旅行も大切な日々。いつしか涙を流すことがどうしてこんなにも辛いのだろう。いつもそんなことは想つてはいなかったけれど。どこにでもいるような人を捕まえてお茶の席を作ったのも楽しかったのに。

そんなことをしたら警棒を持っている人に叩きのめされる。「いつの日か自分のことを」と意味の分からないことを言っていることが今でも遠い未来の果て。いつの間にか大切にしていた日々はこうして封印してしまうのも今では忘れているのだろうか。

わからないことだらけ。わかつていることなんて今でも何もない。ただただそれだけ。

いつも、デッサンをしていた少年が思い出せる。心に残ったいつものような世界観。仄かに感じる心のあどけなさ。私なんてっていう自戒した気持ち。成功した姿を想像できる自分の大切さ。いつもそんなことを描写しようとその少年は頑張っていた。今でもこれからもそうなんだと。そして何度も映した写真の欠片。心の欠片はどこにでも転がっているのだから。

一人ですつと歩いてきた。一人ですつと楽しんできた。二人なんてもうないんだと思いながら二つの気持ちを持っていたから。

空に涙が溢れている。雨として土砂降り。天なんて信じない。だけど。

「こうして最近のことを思い返すのが大事なんじゃないのかな」

いつものように日々が過ぎていく。その中に自分がどこにいるのかもわからないのはきつと気のせいではない。ただただ、そう思うのだ。

涙を渡した少年

頬にそつと触れた少女

二人に望まれた答えは

涙にそつと触れた少年

頬を渡した少女

よく言えば、聞こえることはとても大切なんだと思う。この頃そんなことを考えてしまう。一人が続いたからだろうか。それとも暇つぶしにするために考えているのだろうか。わからないが、確実に言えることは。

天に祈りを捧げる少女の姿が私には美しいと感じ、その声を聞こうとする努力をしているということがある。

私はなぜ、修道士のことを考えてしまうのだろうか。少女は特に何もしていないのだろうか。けれど、それでも時々、少女のことを考え、同じように祈っている自分のことを想ってしまう。いつもそんなことを考えている。

雨が降っている。教会の中で一人。外は雷雨が酷いのか時々災厄が降り注ぐように轟いている。

「暇だ……」

何をしているのか自分でもわからないが、手遊びをするアクセサリーがランタンに輝いている。いつものように笑っている自分の姿が教会の大きな鏡に映されている。綺麗な瞳をしている自分の顔が面白おかしく思えた。

誰が為に鐘は鳴っているのだろうか。綺麗な思い出を持つている私にだろうか。それとも。暇なのはいつものことだからそれはそれでいいのかもしれない。時々そんなことを考えしまうのが今でも続く。

ずっと、ここにいればいい。そんなことも考えるのだが、いつも、私は何をしているのだろう。やはりおかしくなってしまうのかもしれない。でも今は雷雨。出るわけにはいかない。

さて、と、一人呟いて、ご飯でも作ろうとする。美味しいご飯がないが、食べないよりマシだろうと回廊の段から立ち上がる。下に続いている螺旋階段が何階建てかは忘れてしまった。下に行けば他の人もいるのだろうか。そんな期待を少ししてしまうのも仕方ないだろう。どこにでもあるような心をここで間違えてしまったのかと思っていたのが今でもあるのだと信じているけれど。

足音は私だけ。心に彷徨っている。人をなぜ、こんなにも求めているのだろうか、いつの間にか信じていたことがこんなにも碎かれるなんて思ってもなかった。誰もいない螺旋階段がくるくる回る。そしてその中に入って、二人で暮らしていたことを思い出していて、誰かが下にいるのだろうかと考えてしまった。けど誰もいない。そんなことを考えてしまったのだから。私を乗せて螺旋階段がくるくる回る。そして鉄格子が上がる。

誰もいないようにテーブルにパンが置かれていた。特に腐っているわけではなく、誰かがここに入っていたわけではない。そして頃合いになってきたようだ。グラスメント——教会の天井のこと——から陽射しが輝いている。私は涙を流していることに気付く。いつものように楽しくなってきた、料理をしたくて、美味しいご飯を作りたくて仕方ない。今はそんな感情にまわりついているのだから。

調理場に立つ。包丁の中に異世界の扉が開かれているようで、これで食べ物を切ったら面白いことになるのではないのだろうか、と、思ってしまった。いつものように楽しくて、面白いことをしよう。

私は食物庫から材料を取り出した。

いつもの日々

いつもという日常

だけ

いつもという日々が

いつもという日常に

どこかで遠雷が鳴り響く。今日も泥沼の雨。独り寂しく思い出の朝。いつも陽炎が揺らいでいた。あの時の気持ちも色褪せることなく、その響きをいつしか夢に見ていた。私の感情も吐露できるようなそんな気持ちを抱いていた。

いつの間にか、朝の陽ざしがグラスメントに輝いていた。いつものように涙を流すことができるのかはわからないけれど。時々のように思い出して。そしたら、これから一緒にいられるんだと、勘違いしていた。思い出の中に私がいた。思い出の世界に誰かと一緒にいた。その記



憶と記録の答えなんてどこにもないんじゃないかなと考えていたりする。

いつも、そんなことを思っているわけではない。ただ、答えを知りたいからと言っても過言ではない。どこかにいるような、そして答えを知っているかのような、そんな不思議な感覚。それをどこで知ってしまったんだろう。教会の中でいつも叫んでいた、コオロギの声が今は静まっている。そんな中で、私は何もしていないのだから笑える。

どこでもいい。私はこの教会の中で縛られている自分を解き放ちたい。どこかで見つけた小石と一緒に旅をする。なんだか、夢を見ているかのように。悲しむことなかれと呟いて。

何がしたいのかが自分でもわからない。そしてこんなことを考えている自分が恥ずかしくて。ただただ、純粹に想うことがこんなにも難しいのだと。

「やめやめ。すぐにこんなことになるから」

気づけば朝食のパンがオープンベーカーリーの中で焦げてしまったことに気付く。考えすぎて通り過ぎた考えが面白おかしく思えた。教会の中でオープンベーカーリーがあることに時々面白おかしく思えるのだ。小奇麗なパンが焦げてしまったことも面白おかしく思えてしまうのはどうしてだろう。時々のように思い出すのは様々なことを思う。

とりあえず、朝食のパンを食べたいのだが、もう一度作るとなると、とても大変な出来事に出くわすのではないのだろうかと思うのはどうしてか。私はとにかく、小麦粉をとってきてボウルのなかに突っ込む。そして一生懸命にこねる、撫でる、回す。

「いや、違うでしょ」

ん？ と隣を見ると、友達のヨンが来ていた。

「その呟きは何なの？」

ヨンは私を見てなぜか、嫌悪感を見せることなくベーカリーに顔を突っ込む。今日は私が当番だったことは気付いていた様子。

「うわあ。なるほど、だからまた最初から」

「いいじゃん、というかごめんなさいい。一緒に作ってあげられることができなくなっただけ、どうする？」

「いや、私は遠慮しておくよ」

「それよりさ」

ん？ とヨンが私を振り向く。鳶色の瞳に哀しみのようなものが作られているのは気のせいではないのだろう。でもそれを言及するのも変な話だ、とも思い、とりあえず、私は何かをすることは止めておく。

「今日、どこかに行けないかな」

「どうしたのさ。突然」

「だって、どのくらいの日々が経ってもお許しを貰えないじゃん？ シスターもロリコン野郎だし」

「いや、男性じゃないじゃん。というか欲求不満？」

「そんなことじゃない。幼女好きって言いたい」

「あんたと私が幼女ってことになってしまったことに否定意見一票」

「そんな言葉どこで覚えたのよ」

「異世界の政治の国で」

「あ、異世界の扉開くようになったんだ」

「うん。だから呼びに来ただけ。行く？」

「そうだねえ。行きたいけど、朝ごはんとか食べたいんだよね」

「じゃあ、私はとりあえず、用意だけはしておくね」

「ありがと。ヨンの分も作っとくね」

「はいはい」と

そしてヨンは壁際にセットされている扉を開けてその奥にある、いつものカーテンを開く。

そこはシスターにも見つかっていない秘密の小口。異世界といった場所にはそういう入り口から入っていくのだ。

私は小麦粉を何度もこねまわって、形になってきたらそのままオーブンの中に入れた。

そして温度調整をして、綺麗な本棚から一冊の本を取り出す。美しき存在として私の前に現れているかのような天使の絵が特徴的な冊子。その本を見ているいつもうつりする。この調

理室にある本はシスターにも許可が出されているの本なので安心して読むことが出来る。

ただ、いつも楽しそうにシスターは教会から出て行って男と遊んだりでもしているのだろうか。ミサとか歌わず、大声で民謡でも歌っているのだろうか。私は何をしているのかはわからないのだが。いつものように遊んでいるのは私だけではないのだが。

「私も早くシスターになりたいな」

修道女という身分の為、楽しいことは禁欲とされているのであまり嬉しくない。仕方ないということなのだろう。

「まあ、いいんだけどね。それにしても久しぶりだな」

何が？　と言ってしまえばいいのだろうか、とどこかで聞こえた。修道女というめんどくさい立場は少しでも淑女になれとでも言っているかのようにだと信じている、とまた意味の分からない部分が少しだけあった言葉をまた聞いた。どこから聞こえているのかはわからないのだが、ただ、その声はどこかで聞いたことのあるものだった。

「もう、いるんだ」

ヨンはもうすぐ来るだろう。心に響いたあの旋律がそんな声。美しき歌姫の芳しき声。魅惑的で蠱惑的で。シスターがこんなにも身近な存在だと知ったときの感情と言ったら。

その声は女神像からだろうか。それとも、その声の在り方に私は誘われているのだろうか。わかつているのだから、それはとても美しきものだ、わかつているから。

いつも、そうやって暮らしていた過去。どうしてそんなに乱されているの？ シスターのせいなの？ わからないのに、時流は止まらない。いつしかそんな風に暮らしていたのに、それは失くしてしまったものののだろうか。

わかつていたはずの答えはやはりわかつているのだから。

私は行くだけ。ただただ、目の前にある幸せをつかみに行くための異世界の旅。異世界の中に何かがあるから。それは美しき世界なのか。それとも、これから始まる異世界の放浪を止めることなく始まる物語。

何かを追い求めている私とヨンはいつものようにここで待つていればいいとは思っていない。どこか遠くに行つてしまうような錯覚を覚えてしまう。面白いことだと思えた。楽しいことだと思え、そして美しさを追い求める。それは果てのない変わりゆく季節の中に一つの氷があるからだろう。

どこか遠く、遥か彼方。私の故郷がどこにあるのかすらもわからない。私は故郷を離れていくのだろうか。

わかつてしまつている感覚はほとほと共に感じる神々が私に全ての答えを告げに来たように感じてしまうのだから。

美しき世界。それが待つている。

私は――。